いつもあなたと共にいる

ドン・ボスコの風

BOLLETTINO SALESIANO • LUGLIO 2010

特集 **宣教**

日本から世界へ

フィリピン、ボリビア

慈愛と祈りの人

チマッティ神父

連載 **第3回・始まった日本での宣教**

特別インタビュー

自立援助ホーム「ふきのとう」

澤田正一・加代夫妻に聞く

NO. 5

「風」のカレンダー 七月

ペトロ岐部

故郷大分県国見町岐部の「ペトロカスイ岐部神父記念公園」に立つ像

2008年11月、ペトロ岐部を含む188名の江戸時代の殉教者が「福者」という位にあげられ、その祝典が長崎球場で行われました。

日本の若者よ、ペトロ岐部の情熱を学べ

岐部は動乱の豊後（大分県）に生まれ育った。九州の覇者を誇った大友家は鹿児島の島津に押され、天下統一を狙う豊臣秀吉に援助を願った。秀吉軍は南下し、九州を制圧し、その余勢を駆ってキリスト教禁教令を発布した。更に時代は移り、一六〇〇年には関が原の戦いで大友は国を失い、豊後は小国に分割された。父母の愛情を豊かに受けて育ったペトロ岐部が国東半島岐部の地を去ったのは十二歳のことであった。将来の教会を担う優位な若者を養成する機関（セミナリオ）が当時島原半島有馬に設けられていた。少年期をそこに過ごし、セミナリオ卒業後諸教会の手伝いをしながら司祭になる日を夢見ていた。しかし、時代はまた大きく移り、徳川家康はまたもや禁教令を発布し、全ての聖職者を国外へ追放した。長崎から追放される船上にペトロもあった。

流されたマカオでは日本人は司祭に叙階されない理由があり、彼は司祭になる夢を追ってインドのゴア、更にシルクロードを徒歩でエルサレムへ、そしてベイルートから船でベニス、ベニスからローマへと長い旅を一人でしたのであった。司祭になりたい一心からであった。やっとローマで許可を得て、司祭に叙階された。しかし、それに満足することなく、また長い歳月を経て母国日本で司祭として仕事をするために帰国の途についた。迫害の真っ只中に母国に戻ることは死を意味していた。死を覚悟して帰国した彼を待っていたのは逆さ吊るしの処刑であった。

「われに魂を与えたまえ、しかして他のものを取り去りたまえ」とはサレジオのモットーである。サレジオの精神に生きたい若者よ、ペトロ岐部の宣教への情熱と勇気を学ぶがよい。

高松教区司教　溝部　脩

七月一日はペトロ岐部司祭と一八七殉教者を記念する日です。

本誌記事中、氏名の前のFr. Br. Sr. はそれぞれ、カトリック神父(Father)、修道士(Brother)、シスター（Sister）であることを示します。

巻頭言

サレジオ会最高評議会 宣教顧問 Fr. ヴァツラフ・クレメンテ

宣教師の夢を追って

一八七五年にアルゼンチンに向けて宣教団が派遣されて以来、貧しく、見捨てられた若者のために神の愛のしるしとなるドン・ボスコのカリスマ（教会を形づくり、すべての人に奉仕するために神から与えられる力）は、生涯を捧げる宣教師たちの働きによって、あらゆる国、あらゆる環境、文化の中に広がり、根づいてきた。ドン・ボスコから受け継いだ「宣教」というサレジオ会のカリスマをローマの総本部で担当するのは、最高評議会のメンバーの一人、宣教顧問である。現在、宣教顧問を務めるヴァツラフ・クレメンテ神父が、宣教師となるまでの自らの歩みを語った。

一九八二年、私はサレジオ会員としての初誓願を宣立しました。その頃ある司祭が宣教について熱く語るのを聞き、その夜は眠れなかったのを覚えています。私は「キリスト教徒でない人々の所へ行き、その人たちと自分の信仰を分かち合いたい」という熱い思いに駆り立てられたのです。

当時信仰の自由が認められていなかった私の祖国チェコスロバキアでは、司祭になることはもちろん、宣教師として国を出ることはそれ以上に不可能なことでした。そのためチェコのサレジオ会は極秘裏に、まだ神学生だった私のために綿密な計画を立て、それを決行する時を待ちました。二年後の一九八四年八月、観光客を装った私はバスに乗り、二日かけてプラハからアドリア海のイストリアへ、そしてイタリア国境に向かい、サレジアニ・コオペラトーリの会員に案内してもらいながら夜間アルプスを越えました。パスポートもなくビザもなく、持ち物は小さな鞄だけ。中身は数点の夏服と一冊の本、それはもちろん新約聖書です。安全上の理由から両親にも友達にも、共に生活していたサレジオ会員にさえ別れを告げずに国を後にしたのですから。

私の宣教師としての人生が始まりました。当初はそのころ始まったばかりの「プロジェクト・アフリカ」への参加を夢見ていましたが、修道会の上長たちは、私を方角の違う東洋の韓国へ派遣することを決めたのです。でも人生の方向は少しも変わりません。宣教師になること、私はそれを望んでいたのです。

イタリアで過ごした一年余り、そして韓国へ派遣された後も数々の困難を体験しましたが、神の愛を伝える熱意と力は不思議にいつでもすぐに湧き上がりました。何年か経って気づいたのですが、すべてを後にしたことが私を若者たちの魂に益々近づけ、忍耐をもってあきらめることなく歩んできたことで彼らと共に歩めるようになったのだと思います。宣教師としての生活、全面的に自分を捧げること、喜びにあふれて地の果てまでも若者に福音を運ぶこと、そのこと自体がどんな疲れにも耐える力を呼び起こし、犠牲を苦にすることなく行動させてくれます。

私を宣教へと呼んで下さったことを主に感謝します。多くのサレジオ会員が宣教師の召命（神さまからの招き）を喜びのうちに体験できるよう、主に願いましょう！

ヴァツラフ・クレメンテ神父

一九五八年、チェコ（当時チェコスロバキア）に生まれる。一九八二年、初誓願。一九八六年、司祭叙階。韓国に宣教師として派遣され、院長・管区長を務めた。二〇〇二年に東アジア・オセアニア地域顧問。二〇〇八年から宣教顧問として現在まで、世界各国を巡る多忙な日々を送る。

愛のために祖国を後にする

サレジオ会日本管区長　Fr. アルド・チプリアニ

毎年九月の最後の日曜日、トリノの扶助者聖母大聖堂で宣教師派遣式が行われます。その中で、サレジオ会総長から二人ひとりに十字架が授与されます。これは一八七五年、ドン・カリエロを団長とする最初の宣教団がアルゼンチンに派遣されたときから毎年続いている儀式です。今年の九月二十六日は一四二回目となります。

兄弟を探しに

十一月十一日、満員の扶助者聖母大聖堂で一人ひとりに十字架を授与した後、ドン・ボスコは宣教団に別れの挨拶をしました。「あなたがたは、子どもだけでなく数え切れないほどの大人が、読み書きもできず、キリスト教の教えも知らずに生活しているのを見るでしょう。彼らのところに行って、私たちの兄弟を探すのです。……この宣教団は、からし種が大きな木に育つように、大いなる善を生み出すものになるでしょう。」

宣教師たちが携えていたドン・ボスコの「二十の特別なすすめ」は、ドン・ボスコが宣教師たちに望んだことの「神髄」です。その中には、次の言葉があります。

- 富や名誉や尊敬ではなく、魂を探し求めよ。
- 特に病人、子ども、老人、貧しい人々の世話をしなさい。そうすれば、神の祝福と人々の信頼を得られるだろう。
- あなたがたは互いに愛し合い、助言し合い、過ちは正し合いなさい。嫉妬や恨みは抱かないように。むしろ二人の善が皆の善になるように。一人の痛みや苦しみが皆にとっても痛みや苦しみと見なされるように。
- 苦悩にあるとき、天国には大きな報いがあることを忘れないでください。

その日のうちに宣教師たちをジェノヴァ港まで見送ったドン・ボスコは、感動に打ち震えていたそうです。

「魂をください Da mihi animas」

「魂をください」というドン・ボスコの情熱は、今も宣教師の心に生きています。二〇〇七年にパプア・ニューギニアに派遣されたコンゴ出身のゴイ神学生はこう話しています。「…わたしはキリストの愛に魅惑され、ドン・ボスコに従ってその愛を証したいので宣教師になりました。祖国を後にするのは簡単なことではありませんでしたが、宣教師になるのを、それ以上遅らせることができなくなったのです。地の果てまで行き、福音を告げ知らせなさい！という声が響き続けたからです。」

私たちに受け継がれているこの宣教の情熱は、神様の愛に根ざすものです。神様が愛のために人となられたように、私たちも福音を伝えるには、人々、若者への愛のために「祖国」を後にしなければなりません。人によって、生まれ育った国を後にする宣教の召命もあれば、住む場所を変えずに、殻を破って自分の状況から踏み出す場合もあるでしょう。私たちを呼んでおられる神様の声に、信頼をもって応えたいと思います。

［イラスト：ヨーヘイ］

みことばマジック

あなたがたに新しい掟を与える。
互いに愛し合いなさい。
わたしがあなたがたを愛したように、
あなたがたも互いに愛し合いなさい。（ヨハネ福音書13章34節）

十字架上で自分の命を捧げられる前、「最後の晩餐」の席上で、イエス様は弟子たちに、この言葉を語られました。つまり、これはイエス様の遺言だと言えるでしょう。この後にもイエス様は「互いに愛し合いなさい！」とさらに2度も繰り返し言われており、これを掟、命令として与えておられるのです。この言葉に、イエス様の強い思いが込められているのが見えてきます。

ところで、気づいたでしょうか。よく観ると、イエス様は「あなたがたに新しい掟を与える。」と言われています。互いに愛し合うことの大切さを説いた教えは、旧約聖書の中にもあるわけで、イエス様が言われる前からも言われてきていることであり、特別に新しさを感じるものではありません。では、イエス様の言われる「新しさ」はこの掟の一体どこにあるのでしょう。

それは「わたしがあなたがたを愛したように・・・」というところでしょう。イエス様がどのようにわたしたちを愛されたのか、それを知る必要があります。自分の命を捧げてまで、愛を示されたイエス様の姿、十字架のイエス様の姿を見つめることによってイエス様のわたしたちに対する愛を悟り、イエス様の愛をもって生きられるようになりたいものです。

さて話は変わりますが、先日飛行機を利用した時のことを思い出しました。通路を挟んだ隣の席には、4、5歳の男の子とお母さんが乗っていました。様子からして、その子は飛行機に乗るのは初めてのようで、ワクワクしているのがわかります。座席前のテーブルが気に入ったのか、開いたり閉じたり、興味津々。でも、とうとうお母さんからたしなめられていました。その後は、飛行機から自分だけが降ろされるのはごめんだということで、おとなしくしていました。飛行中は、客室乗務員さんが絵本を貸してくださり、それをお母さんに読んで聞かせてもらって嬉しそうでした。いよいよ着陸する時には、タイヤが出る音と振動がした頃から緊張し始め、不安になってしまい、とうとう「こわいよ！」とお母さんにしがみつきました。お母さんは「だいじょうぶよ！」と言ってぎゅっとその子を抱きしめてあげていました。

そんな一部始終を、本を読む振りをしながらずっとアンテナを張って伺っていた私は、この親子の微笑ましいお互いの愛を感じ、心が和む思いを抱いていました。そして、きっとこの子は、お母さんから愛されたように、人を愛する人に育っていくに違いないと思いました。

「私があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」。イエス様のこの掟を守るように努めると同時に、自分自身も他の誰かに、このイエス様の言葉を自分の言葉として言えるように努めることも素敵なことではないでしょうか。親として息子、娘らに。大人として子どもたちに。教師として生徒らに・・・。そして、その子どもたち、若者らが人を愛するように育つなら、またその愛は、受け継がれていくものとなっていくことでしょう。

さぁ、思いもしないトリックがイエス様の掟の中にあることがわかったでしょうか？そうです。イエス様のこの掟が守られるならば、愛はこの世に永遠と受け継がれ、広がっていくのです。

Fr. Mickey MURAMATSU(村松 泰隆)

Mission

宣教・日本から世界へ

ドン・ボスコは、貧しく、見捨てられた若者に神の愛を伝えるため、あらゆる国に宣教師を派遣する夢を抱き、実現していきました。その思いは現在もサレジオ会、サレジアン・シスターズ、イエスのカリタス修道女会のカリスマとして、脈々と受け継がれています。

今回は宣教師として長年ご活躍のサレジアン・シスターズの望月久枝シスターと、サレジオ会の倉橋輝信神父のお二人にお話を伺いました。

宣教とは、神さまの愛を伝えること

Sr.望月久枝
サレジアン・シスターズ

—宣教女になりたいと思ったのは、いつごろですか?

実は、学生時代、まだ洗礼も受けてない時でしたよ。静岡の大手町教会で当時ブラジルから帰っていらした宣教師の神父様のお話を聞いて、私も宣教女になって外国に行きたい……と思ったの。

その後、洗礼を受けて修道会に入ることはできても、宣教女になる夢は断念していました。でも、小学校で教えていた時、英語の勉強に行きたいという希望を出したら、時の管区長様から、三年間英語の勉強しながら宣教に行ってらっしゃい、というお話があったのです。

フィリピンの宣教女として働いていたシスター金子の後任として、行ったのが今から十年前。初めは三年というお話だったけれど、三年経っても〝帰っていらっしゃい〟という呼びかけはないし(笑)、これってどういうことなのかな〜って考えたわけです。でも、これが神様のご計画ならと思ったので、いいですよ、と……現在に至っています。

—現地でのお仕事は?

現地の子ども達に日本語を教えるということから始めました。マニラから北上するとパンパンガ州のマバラカッという所にサレジアン・シスターズの経営する総合学校(幼稚園・小学校・中学校)があります。資産家の恩人から土地を提供されて地域の子女達の教育に貢献するよう要請を受け、女子教育開発センターが設立されました。現在のテクノロジーセンターで電気科・コンピュータ科・観光ホテル科で学び、しっかりした資格を取得して将来のため安定した職に就けるという、女性にとって福音的望みが期待できるようになりました。そこに通って来る十七、十八歳の学生は貧しく、シスター達の援助に支えられながら学んでいます。学校側としても、月謝の払えない学生には就職してから少しずつ返金する奨学システムがあります。返金するといっても一〇〇ペソ(二〇〇円)位ずつです。当然、学校としては大変苦しい運営ですから、第二外国語の教師を雇えません。それで私が呼ばれて日本語を教えています。

日本語を学ぶことで、彼女達はフィリピンだけではない他の国の文化に触れます。現地には日本の企業体があり、そこに来ている日本人と出会う時には、さほど緊張せずにいられますし、優先的に雇ってもらえます。日本の文化を知っている卒業生として受け入れられ、歓迎されます。

ある時、社会福祉の仕事をしている現地のシスターに、日本からJapanese Philippinoが帰ってくるから一緒に空港まで迎えに出てほしいと言われ、出かけました。日本人の父とフィリピン人を母に持つ子ども達が、強制送還される母親と一緒にフィリピンに送られてきました。英語もわからず日本語しかわからない子どもが突然知らない国に連れてこられた訳です。こういう状況に置かれた子ども達のお世話をする事って、もしかしたら私が宣教女としてここに来たことの次のサインなのかなと思いました。

—宣教女としてフィリピンの子ども達に伝えたいことは?

宣教に行く前に、フィリピンはカトリック国なのになぜ私が宣教に行かなければならないのかしら、皆神様のことは知っているのに、と思いまし

た。行ってみてわかったことは、〝貧しい〟という理由で将来の希望を持てずにいる子ども達が大勢いるという事実です。そういう子ども達に、〝神様はあなた達を愛しているのよ、あきらめないで希望を持って〟と伝えたいと思いました。そのために、学校に行きたい子には中学校のコースに通わせてあげて、その後一年でもトレーニングセンターに通えばちゃんと仕事に就くことができる。そうすれば将来の希望が持てるじゃないですか。

ストリートチルドレンを見つけたら、水道のところへ連れて行って髪を洗って体を洗って、静岡VIDESから送ってもらった服の中から合いそうなのを選んで着せてあげる。お米を持たせたり卵焼きを作ってあげたりもします。静岡VIDESの皆さんや、静岡サレジオの生徒や保護者の方々からのご支援、ご協力は、ここでは宣教の大きな支えとなっています。特に三年前、この方々は寄付を集めてネグロスのマリハウにコンクリートの二階建て校舎を建てて下さいました。全部で八教室、今では一〇〇人近い生徒が通って来ています。そしてほとんどの生徒が皆さんからの援助による奨学金を受けています。そこでも私は日本語を教えています。

私は今、ネグロス島に住んでいますが度々マニラに行くので、トレーニングセンターを出た子ども達の働いている姿を見に行きます。ホテルの厨房で真剣に働く姿や、ていねいに心をこめて掃除などに精を出して働いている彼女達のその生き生きした姿を見るのが、私の一番の喜びです。

—後輩の若いシスター方へのメッセージを！

私、前はね、フィリピンだけではなくいろいろな所に宣教に出てほしいと思っていました。でも今、日本には、経済的に豊かでも悩んでいる若者が大勢いますよね。私の話を聞いて！と叫んでいる子ども達の声を聞き、共に歩んで下さいとお願いしたいです。

それが宣教であり、サレジアン・シスターズのカリスマです。宣教というのは、外国に行って働くことばかりではなく、神様の愛を伝えることだから、あなたの目の前にいる若者達と一緒に話し、悩み、考え、聞いてあげ、支えてあげることでしょう。これはシスターだけではなく、子どもを育てているお父さん、お母さんにも言えることですね。

喜びに満たされた国、ボリビア

Fr.倉橋輝信
サレジオ会

—宣教師としてボリビアに行くきっかけは?

司祭になって十年ほど経った時、修士課程の霊性神学という勉強のためにローマに留学しました。まあ、頭が悪いからもうちょっと勉強の必要性があったのでね(笑) その間にサレジオ会の総会議があって、当時の本田管区長がローマの本部にいらっしゃいました。長い会議も終わった頃の十二月八日に、イエスのカリタス修道女会のシスターの誓願更新という式があり、そこに管区長と私も呼ばれたのですが、私は留学中に知り合った一人のスペイン人の神父を誘って行きました。彼はボリビアにあるサレジオの全寮制の学校で働いている人です。その学校には一二〇キロメートル離れた移住地から、五十人くらいの日本人中高生が入ってきているのだそうです。

ミサが終わってから、彼が管区長と何かずうっと話していました。管区長は小さな手帳を出して、メモをしていましてね。その十日後、私はローマの本部に呼び出されました。そこで、管区長が「倉橋神父、ボリビアで今一人の日本人の神父を必要としているようだ。日本人のためだからスペイン語の必要はない。これは管区長命令ではないけれど、もし行きたければ願書を出しなさい。」

その時、是非行きたいと思ったわけではありません。ただ、総会議で選出されたばかりのヴィガノ新総長がその夜の講話で「まだ一人も他の国に宣教師を送っていない管区がある」という話をされていたので、日本からも行かなくてはならないな、と思ったし、管区長に願書を出すように言われたからとにかく行ってみようかなと思ったのです。そして、今から三十年前の一九八〇年二月十一日、日本を出発しボリビアに向かいました。

—ボリビアでの仕事は?

日本では一つの教会に信徒は何人ぐらいでしょうね? 千人ぐらいですか? 地方の小さな教会は五十人とか百人とかでしょうね。

私のいるサンタクルス小教区には六万五千人います。三人の神父であちこちにある教会を回り、日曜日には一人で最低でも四回のミサをします。私の場合は、朝八時半に教区の教会でミサのお手伝い、十時半のミサの間に信徒の告白を聞き、十一時十五分ラ・サールの学校の大きなチャペルで各学年毎のミサ、それから毎日二、三件は入る葬儀ミサ、夜になったら私が他の修道会から払い下げてもらって日本人のために作った教会で七時半と九時にミサ、終わるのが十時、戸締りをして十時半にインスタントラーメン(笑)! 今回もトランクにいっぱい詰めてボリビアに持って帰りますよ。

—ボリビアの貧しさというのは?

ボリビアは農業国です。ここは貧富の差が激しいところで、昔の日本のように大農場主と小作人がいます。小作人は家族ぐるみでその農場の中で生活している。お父さん、お母さんが働いている傍で男の子ならば六、七歳になれば一緒にサトウキビを切ったりするわけです。女の子なら水汲み、洗濯。だから学校なんか行けないですよ。ボリビアの子どもの就学率は三二・四%です。七十%近くは小学校に行っていない。運よく小学校に入れても、もう読み書きが出来たから、って学校を途中でやめてしまい、生活のために働かされるのです。

―そういう状況の子どもへの教育は?

サレジオ会のボリビア管区では、十年前から学校を建てる大きなプロジェクトに取り組んでいます。サンタクルス県、県といっても日本と同じ大きさですよ。その中の貧しい地域を選んで、村の一角に土地を買い、六教室ある平屋の質素な建物を建てる。大体四百万円くらいあると出来ます。それを年に二つか三つ建てていくプロジェクトです。今までに十三棟建てました。建物を建てるだけではなく、そこで働く先生の給料、子ども達の教材や給食の費用、そういうことも考えなければなりません。

ボリビアの貧困問題を解決するためには、子どもを教育することが大切です。心から感謝したいことは、ボリビアのためにと日本の皆さんがDBK(ドン・ボスコ基金)に寄付をしてくださることです。そこがこちらのサレジオ会の財務の方に送金して下さっています。新しい学校を作るため、養護施設にお米を買うため、教会に来る貧しい子どもの給食のために、シスターの学校に通っている貧しい子どもの奨学金にと、本当に助かっています。

―大変な毎日の中での喜びは?

イエス様は、幸せになりたいならこれを実行しなさいと、八つの条件をお与えくださいました。これは全部お金で買えないものです。その中の一つに「泣く人は幸い」という言葉があります。家族が死んで、お葬式。悲しくて泣きます。これは幸せですか?そういう意味ではありません。泣いている人と一緒に泣ける人が幸せなのです。悲しんでいる人を見て悲しむ人、貧しい人を見て自分も貧しくなることが出来る、そういう人が幸せなんです。貧しい人に仕える喜びこそ、神様と共に生きる喜び、ボリビアでの日常はこういう喜びに満たされています。

そして与える喜びね。三十年間で三万人近くの洗礼、結婚式五千組、そこで生まれた子ども達の洗礼、初聖体……もう嘘のような幸せです。愛する人、また愛してくれる人がいる。そこにこそ本当の喜びがあります。サレジオ会員だからこそ味わえる喜びですね。

―お父さん、お母さんへメッセージを!

私の宗教の先生だった神父様が、こういうことをおっしゃった。「お父さんやお母さん、あるいは子どもを教育する立場にある人には三つのことが必要です。

一、宗教の専門家である必要はないけれど、基本的なキリスト教の知識を持っていること。それにプラス、ドン・ボスコの精神を知ること。

二、待つこと、忍耐。子ども自身が気づき、成長するよう見守る姿勢です。ドン・ボスコにもし忍耐がなかったら、サレジオ会は誕生しなかったといわれるほど、彼は忍耐の人でした。

三、喜びを感じていること。生きていることの喜び、苦しみでさえも受け入れ、乗り越える喜び。この喜びこそが神さまと共に生きているということです。人生は喜びに満ちていることを子ども達に伝えたい。」

身体中からあふれんばかりの喜びと明るさ、今回お話を伺ったお二人から受けた共通した雰囲気です。長い宣教の道のりの中で困難の時もあったことでしょう。それを少しも感じさせないのは、神様への信頼と、培われたサレジオの精神に違いないと思います。ありがとうございました。(編集部)

往復書簡

第3回

育った環境の中で出会った方々から多くの影響を受け、司祭への道を一歩一歩、歩んでいる眞田登美彦神学生が、現在の心境を師の一人として仰ぐ溝部司教への手紙に託しました。司教からは、あたたかい励ましのことばが届いています。

溝部司教様

いかがお過ごしでいらっしゃいますか？

9月11日は北川大介助祭の司祭叙階式と共に、私の助祭叙階のミサの司式をなさって頂けますことを心より感謝申し上げます。私はそのための準備をしておりますが、今になって色々なことを考え、あらためてこの司祭職の道を歩むようになったお恵みに対し、神様に深く感謝しております。

幼い頃大分の小百合ホームで、中学からは、かつて司教様が院長をなさっていた中津のドン・ボスコ学園で育てられ、何人もの神父様、職員、ボランティアの皆様のお世話になりました。その方々と出会ったことと、意味もわからない時期から毎日のようにミサに与っていたことで、神様の存在を心の奥底に刻み込まれたのだと思います。中学三年の時に洗礼を受けましたが、その時は自分の意志ではなく、たまたま友人に誘われたからという消極的な動機からでした。

そんな私が高三で進路を決める時に「マリア様に相談しなさい」と勧めてくださったのが、当時ドン・ボスコ学園の院長だったブリ神父様でした。折あるごとに聖堂で祈っていましたが、ある時本当に「私について来なさい」という声が心に響いた気がし、志願院へ入ることを決心しました。その時司教様が丁度サレジオ会の管区長でいらっしゃいました。その後、年に一、二回、ドン・ボスコ学園OBの会に招いて頂き、司教様が卒業生をとても大事にしておられることを肌で感じました。

私は、自分が司祭となるにはあまりにもいろいろな面で不足していることを自覚しています。知識も経験も浅く、その上、口下手ですし…。幼い頃事故で右手の小指の先を失いました。自分で気にしなければいいのですが、ついつい隠してしまいます。ある側面はホントに他の人よりも劣っていると不安になります。でも、誰もが「私はここに居ていいんだ」と思えるような、ホッとできる空間を醸し出せる司祭になりたいと願っています。

サレジアン・シスターズとサレジオ会で育てられた私は、幼い時から耳にしていたドン・ボスコの青少年への関わりに、特に強い憧れを持っています。彼がモットーとした「私に魂を与えたまえ」という言葉を、これからの青少年と私との関わりの中で自分の言葉として深め、求め続けて行きたいと思っています。それは自分だけの力では到底出来ることではありません。私自身がイエスさまと深い交わりがあってのことと自覚しています。

そして私の不足している部分は、きっと神様が補ってくださると楽観的に考えて、この道を歩んでいければと思います。

眞田登美彦

往復書簡

眞田登美彦様

お便り拝見しました。この度助祭に叙階されるとのこと、こんなに嬉しい知らせは最近ありませんでした。とうとうと言うか、やっとと言うか、その決断に到ったことが何よりも嬉しいことでした。あなたは幼い時から人生を味わう体験の連続でした。それを知っているだけに、私は嬉しく思うのです。大分の小百合ホーム、中津のドン・ボスコ学園と、普通の家庭で育った人とは全く違う体験を持っています。それこそあなたの勲章です。それだけに私は嬉しいのです。苦労した体験のある司祭は、苦悩する人々の側に立つことができます。あなたはそれができます。

私はドン・ボスコ学園の院長として5年を過ごしました。私の人生でもっとも素晴らしかった5年間でした。出会った子どもたちは今でも私の最高の宝です。私はその時出会った子どもたちの表情をはっきりと思い出します。腰を据えて若者たちと出会ったら、必ず彼らはついて来ます。大切なのは逃げないことです。ドン・ボスコのことばに、「最善は善の敵である」とありますが、本当にそうです。完璧だけを求めて、正論を吐いて、腰をあげない生き方からはサレジオ会が求めている「魂の救い」などは到底望めません。何があっても“はい、やってみます”という精神のことです。

お説教めいた文章になりました。あなたのはいつもバックで攻めを凌ぐサッカーでした。その足捌きのすばしこさ、これは良く私が覚えていることです。その仲間と一緒に祝いをさせて貰える日が近いのが最高の喜びです。

高松教区司教
溝部　脩

司教について
カトリックの聖職には、助祭、司祭、司教がありますが、そのなかで司教は最高位の祭司職です。特別な場合を除いて通常は各地域の教会(教区)の長として教区を統治し、司祭たちの協力を得て神の愛と教えを告げ知らせる役割を果たします。溝部司教は、サレジオ会司祭だった2000年に司教に叙階され、仙台教区司教を経て高松教区司教になりました。

特別インタビュー

自立援助ホーム「ふきのとう」

「ここは怖くないよ、安心していいんだよ」心に傷を持つ少年たちがたどりつく家、自立援助ホーム「ふきのとう」を立ち上げ、現在六人の少年少女と共に暮らす澤田正一さんと奥様の加代さんにお話をお聞きしました。

プライバシーへの配慮から画像を加工してあります。

――澤田さんご夫妻で運営している自立援助ホームについて、どんな内容なのか教えて下さい。

澤田　色々な理由で親に育ててもらえない子どもは、二歳までは乳児院、それ以上は児童養護施設で保育します。この子たちは義務教育が終わると、高校進学を希望すればそのままそこで暮らせますが、そうでなければその施設を出て行かなくてはなりません。十六歳になるかならないかで、家庭という拠り所を持たない状態で世間に放り出されてしまうんです。そういう子ども達を受け入れて、いわば私と妻が親の代わり、と言うよりは信用してもよい大人という立場で一緒に暮らしながら、自立できるまでサポートをするというものです。

――このお仕事をなさったきっかけは何ですか。

澤田　私は以前、児童養護施設の職員をしていました。その時、その施設に入所してくる子どもの多くが、親から虐待を受けているということに驚きました。そういう子ども達は心に大きな傷を負っています。それなのに時が来れば、誰からも守ってもらえず社会に押し出されていく、そういう事実を知りながら、職員としての業務や限界があって何もできない。このままでは子ども達に申し訳ないと、彼らの居る場所を作ろうと思い、自分が育った土地に近いこの大分に「ふきのとう」という施設を作りました。六年前のことです。

――簡単なことではなかったでしょうね。

澤田　それはもう、いろいろありま

した。私は最初からこの道を目指していたわけではないんですよ。高校を卒業してから色々な仕事を転々としましてね。弟のように思っていた後輩の死に遭ったり、土木工事をやっている時私の身代わりになって同僚が山崩れに遭って生き埋めになってしまったり。不思議と私は生かされて、福祉の道に導かれていきました。でもね、保育士の資格を取る時のピアノの練習は大変でしたね。その時三十歳を過ぎていましたから指が自由に動かない。でも目的達成のために必死でバイエルの一〇〇番を弾けるまで練習しました。人間やる気になれば何でも出来るんです。

加代　もちろん、経済的にも大変でしたし、何より家族の理解と協力が必要でしたね。まだ今のような建物でなく、個室もないところに少年達を受け入れたので、思春期を迎えた我が家の二人の子ども達からすれば、大変なことだったと思いますよ。突然知らないお兄ちゃんが入って来て、「おっさん、飯くれ」とか言って。プライバシーも何もない。うちの子ども達から苦情を言われるのが辛くて辛くてね。

でも、今はその子どもが私たち夫婦のやっていることを一番理解してくれています。

――心に傷を負った子ども達とどうやって心を通わせるのですか。

澤田　ここに来るのは親から見放され、虐待された子ども達です。大人は誰一人信用できないと思っています。そういう子にいくら僕らが、愛してるよって言葉で言ったって何も伝わりません。ドン・ボスコの言葉に「子ども達自身が〝自分が愛されているんだ〟と実感しなければなりません」というのがあるじゃないですか。施設で十年間勤めてここで七年目、十七年間荒れた思春期の子ども達と過ごしてきて強く感じることは、根底に自分は誰からも必要とされていない、誰も自分のことは心配してくれない、それがあるんです。荒れた子が悪いことをしても大人は見て見ぬふりをする、もの足りないんです子どもは。だから、いろんなことをしてきた背景を受け止めつつ、あなたはこのまま社会に出て、これでいいのかって、それは毅然たる態度できちんとメッセージを伝えていく必要がある。それが大事だなと思うんですね。

――最近、自分の子に注意をしない親が増えたと言われていますね。

澤田　子どもがほんとに悪い時にはね、怒るんじゃなくて、ちゃんと納得がいくように、相手が子どもじゃなくて大人と思って尊重しながらきちんと話をすることが大事だと思う。特に、ここへ来た子達は親からひどい暴力をふるわれた経験があるので、どなったらもう駄目です！終わりです。もう関係がブッチンと切れて、相手ももうぶち切れて、へたすりゃ僕が殴られます。怒られたことで過去のトラウマがよみがえるんですよ。だから彼らがぶつけてくるエネルギーをど～んと受け止めた上で、時には親のように、時には兄貴のように接しながら共に笑う、喜ぶ、一緒に楽しむ、そして一緒にエネルギーをぶつけ合うということを心掛けています。大人が眉間にしわを寄せて難しいこと言っても子どもは寄り付かない。折角ここへ来たんだから笑いながら生きて行こうって。そういう気持ちですよね。

――澤田さんはどういう環境で育ったのですか。

澤田　実は、私自身も二歳から、別府のサレジアン・シスターズの小百合愛児園という施設で育ちました。小さかったからほとんど記憶はないんです。覚えているのは、窓からいつも聴いていた荒城の月のメロディーと乳児院の匂いくらいです。今でも小百合に行くと「あ、懐かしい、我が家の匂いだ、ただいま！」っていう気持ちになりますよ。

そこでSr.カロリーナ大水という、本当にやさしい、天使のようなシスターと出会いました。小学校の運動会では、僕は足が速かったから一等賞を取りたい、見て貰いたいというわくわく感があったんです。でも昼ご飯の時、小百合の子だけは別の教室で弁当。他の友達は家族と一緒で重箱をパッと開くとフルーツやお寿司が並んでる。そういうのを見ると羨ましかったですね。中学生になってサレジオ会の施設のドン・ボスコ学園に入り、神父様方と出会いました。ボスコ（ドン・ボスコ学園）では楽しいこともあったけれど苦しいこともいっぱいあった。反抗したい年頃の集団生活、自分を抑えなくちゃいけないことも度々ありました。でもこの成長期に、今の私を形成する大切な教育を受けたことは確実ですね。

――その時代で心に残っていることはありますか。

澤田　サレジオ会の神父様ほど子どもと一緒に居る人はいないでしょう。特に覚えているのは溝部神父様のことです。僕がボスコにいた頃は四十五、六歳だったかな。それなのに「ふりかえろう★」と言って国東半島一周一〇〇キロぐらい歩くんですよ、子どもと一緒に。そして僕たちの話をじ～っと聞くんです。それで後から一言「そうしたらどうなるの」とぼそっと言うんですよ。僕たちを尊重してくれているから説教というのはない。大人の目線で「間違ってる」というのもないんです。だから余計に心にグッときましたね。

僕は洗礼を受けたのは中一の時ですが、小百合ホームで小さい時から毎日ミサには行っていました。高校になってサッカー部に入り、朝からすごい練習でミサに行かれるような状態じゃなかった。そうしたら溝部神父様が「澤田さん、折角信者になったんだから、朝シスターのところのミサに行ける時には行こう」とやんわりとおっしゃるんです。そういわれると、そうか、ミサに行かなきゃいけないなと、ふと気付くんですよ。

石井神父様からも素晴らしいメッセージを頂いたな。それも言葉ではないですよ。すごくきれいな写真を撮って見せてくれる。自然の素晴らしさをね。だから今、僕は自分がそうして育てられたように、音楽とか写真とかを通してここに来た子ども達と感動を味わったり、キャンプや登山、ウォーキングをしてます。

――澤田さんご自身が育てられてきたやり方を、ここに来る青年たちに示しているんですね。

澤田　そうだと良いですね。延々と説教しないようにはしています。子どもの話を聞くに徹してはいます。たださっきも言いましたが悪い時には叱ります。門限破ったり、人のものを盗ったりしたときにはね、だめだって、それは絶対世の中で許されないことだと言ってね。言葉は強くなりますけど、でもなぜ門限破ったり、物盗ったりしたらいかんのかっていうことを子どもが本当に理解しないと。ただ怒られるからということだけでは、私と子どもが敵対関係になってしまいますから。

それと、これも大事なことなんですが、ここは私たち夫婦でやってるので普通の家庭の姿を見せることが出来るんですね。今ここにいる女の子の一人は、自分の家で虐待されていたので、家庭というものに恐怖心を持っています。小さい時から父親が母親を殴るのを毎日のように見て育ちました。だから母親というのは父親の言うことを何でも聞いて我慢するもの、それが夫婦関係だと思っているんです。僕と女房とは対等なパートナーシップの関係ですから、僕がお茶をいれたり家事も一緒にやったりしますけど、そんな姿を見て「え～っ？」という顔をして見るんですよ。

家庭の姿って特別なことではないですよ、一緒に食べる、遊ぶ、くつろぐ、会話する、そういう姿をね。心を変えるのは言葉ではないです。どんなにいいこと言ってもなかなか心の中には響かないですよ。

だから私はここに来る子ども達に、イエスさまという言葉を言わな

★自分の行動や考えを思い出して反省すること

くてもいつかは彼らの心に響くかなと、いたるところに十字架を置いています。「僕達が生かされているのは神様のおかげなんだ。だから、辛い時は必ず助けて下さる。何か、神様っていいなぁ」と思って欲しいんですよ。

――お二人がこの道を選んで良かったと思われるのはどんな時ですか。

加代　大人を信用していないこの子たちは、最初すごい目つきで睨んできます。そして、何度も嘘ついて、ある時はボロボロ泣いて、もう全部演技なんですね。大人を試しているんです。それを知ってて、騙されたふりをしながら、説教をせずに話を聞きます。そうやって一緒に生活しながら、ある時「あの時のこと、本当のこと言って」と言ったら「本当は違いました」って謝ったんです。あーこの子と初めて心が通った‼ 澤田を信用してもいい大人と思ってくれた、と感じた時、それが今までの苦労が報われたと思える瞬間です。

澤田　そうだね。僕は教育者なんていう立派なものではないから、自立できるようになってここを出た子達が、二十歳過ぎて戻ってきて僕の肩なんか叩きながら『おじちゃん、居酒屋行こう』って言ってくれたら『お～、いいよ、いいよ、行くよ！』って。そういう関係がずっと続いたらうれしいな～と思っています。

――この雑誌を読んでくださっている子育て真っ最中のお父さん、お母さんへひと言。

澤田　大人というのはいろんなことを経験してきて、先が見える。例えば子どもが、サッカーでブラジルに留学したい、スペインに行きたい。そういう時に、大人は、すぐ現実的に考えて、スペインに行ってどこに住むの？　お金はあるの？　あんたまだレギュラーにもなっていないじゃないのと言って、子どもの夢をつぶしてしまう。夢は夢として受け止めて、そこに心を通わせてほしい。

　それと、ここに来る子どももそうだけど、最近引き籠りの子どもが多いと思うんですよ。なかなか自立できないで家でゴロゴロして、大学にも行かず、働きもせんで、親というのは、そういうのにイライラするんですね。

　そのうち「あんたのしつけが悪い」とかって、夫婦喧嘩が始まるんです。それを子どもは聞いているでしょ。絶対そういうのは無しにして！　子どもの自立心を待つんです。

　待つということは忍耐が要りますよ。ひょっとしたらその子に発達障害があるかもしれない。もしそうなら、一人で抱え込まないで早めに医療機関や、ひきこもりのＮＰＯなどへ行って相談したらよいと思う。大人は長く生きた分だけ、子どもの先々の人生まで読んで親の望む型にはめようとする。子どもには子どもの人格があり、人生がある、それを尊重してあげて欲しいと思います。

ふきのとうは、雪の下で冷たさに耐えながら、明るい春の日が雪を溶かす時を待っている。そんな姿に少年・少女への思いを重ねた澤田さんご夫妻は、施設の名を「ふきのとう」と名付けました。少年たちの自立を目指して共に暮らす澤田さんの考え方、生き方に、ドン・ボスコの教育の原点を見た思いがします。（編集部）

慈愛と祈りの人 チマッティ神父

第三回・始まった日本での宣教

宮崎での洗礼式(1934年)

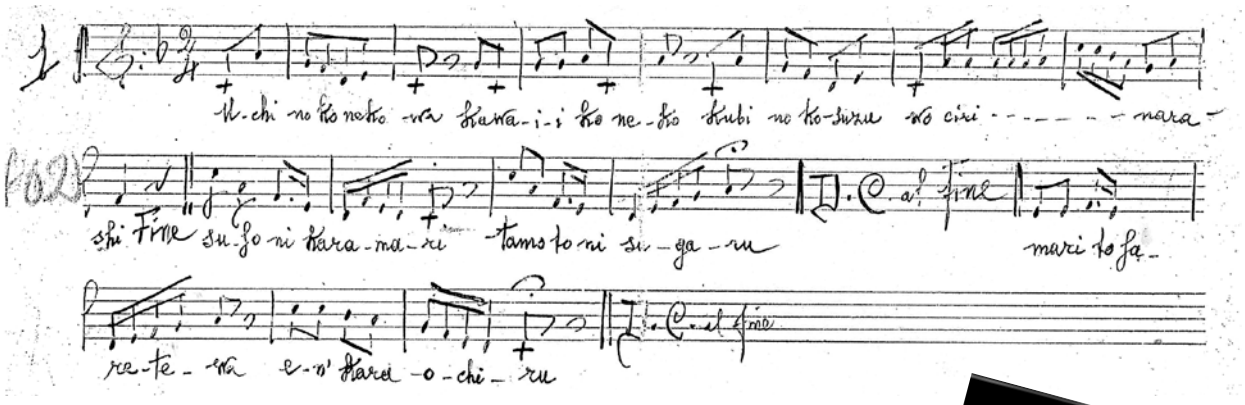
慈悲の心をもって

一九二六年二月十六日、宮崎に到着し、まだまだ日本語が十分でないチマッティ神父が子どもたちと仲良くなるのに、言葉は必要ありませんでした。ピアノを弾けばたちまち子どもたちが(大人までも!)目を輝かせて神父の周りに集まってきたからです。日本の童謡はもちろん、即興で奏でる楽しい曲、聖歌など、その手から魔法のようにあふれ出る旋律は皆をとりこにしました。

一人の修道士はこう語っています。「日本語の勉強のために使っていた小学生の教科書には時々詩が載っていました。チマッティ神父は、その詩を説明してもらってから作曲していました。日曜学校に来ていた子どもたちが最初に歌ったものです。」その時作曲されたのが「うちの子猫」「富士は日本一の山」などです。

当初教会として使用できるように古い家を借りていましたが、そこにある見事な庭園を、子ども達が自由に遊べるようにと壊してしまったのもチマッティ神父でした。当時まだ小学校の低学年の児童であった男性は、後にこう語っています。「サレジオ会員の人たちが来るまで、神父様と言えば子ども等にとって近づき難い存在で、何となく怖い人でした。しかしチマッティ神父様に近づくと、まるで親父のそばにいるかのようでした。(中略)神父様の優しさは、どんな叱責よりもききめがありました。神父様のそばにいると、いけないことをする気さえ全然おこりませんでした。」

コンサートでピアノを弾くチマッティ神父(1928年)



「うちの子猫」直筆の楽譜

大分のコンサートのチラシ

また別の一人はこう話しています。「神父様が音楽家で学者であられたことは皆に知れ渡っていましたが、それでも神父様は非常に庶民的でいらっしゃいました。しかしなんといっても、司祭としての姿が一番目立ち、どんなことにもそれが表われていました。（中略）神父様は、信仰者であるかないかの別なく、どんな人に対しても親切であったということです。誰に会っても大きな喜びを示されるのでした。」

新しい宣教方法

来日して最初の大きな仕事は、鹿児島で行われた「アシジのフランシスコ帰天七〇〇年の記念コンサート」の作曲でした。日頃、事ある毎に惜しみなく助けてくれていた鹿児島県のフランシスコ会の司祭たちに協力するため、彼らの創立者の生誕記念の祝典で音楽の部を引き受けたのです。コンサートは、ピアノとバリトンがチマッティ神父、それにテノールのマルジャリア神父、リビアベッラ神父が加わって、美しいハーモニーで大成功を収めました。チマッティ神父の音楽の才能とセンスはいかんなく発揮され、このときから毎年、多い時では一〇〇回以上のコンサートを全国各地で行うようになりました。

後にチマッティ神父が「私は〝大変偉い人〟か、あるいは〝大変危険な人物〟のどちらかと思われていることでしょう。そのどちらでもないのに。」と冗談を言ったほど、宣教師は非常に厳しい監視下にありました。そんな政治情勢の中で毎年これだけ多くのコンサートが実現できたのは、チマッティ神父が、まず日本の文化や考え方に深い尊敬と理解を示し、日本の音楽の特徴を作曲の中に取り入れたからです。三木露風作詞の、聖テレジア「小さき花を讃美する歌」や、天皇陛下即位にあたり作曲した「大礼奉祝の歌」を教会やコンサートで披露しましたが、そのプログラムは音楽の演奏のみにとどまらず、必ずキリストのことやドン・ボスコの予防教育法などの講話を入れて、コンサートをキリスト教を伝えるための手段に変えました。彼はこれを、新しい宣教の方法としたのです。

難しい日本語の勉強や貧しい生活は続きましたが、この新しい宣教方法で、サレジオ会に任せられた宮崎県と大分県に新たな息を吹き込みました。田野、高鍋、都城、別府、延岡などに新しい教会を造ったり、ドン・ボスコの教育法の話をしたりと奮闘し、その結果、信徒数も増えていきました。また元々の信徒たちも、サレジオ会の家庭的で明るい宣教に驚きながらも、希望を持ちはじめました。チマッティ神父は当時の総長リナルディ神父にこれらの様子を詳しく手紙で知らせ、その内容がこの雑誌（「ドン・ボスコの風」）の基となる「ボレッティーノ・サレジアーノ」というイタリア語のサレジオ会の雑誌に掲載され、東洋の小さな国「日本」がしばしば紹介されました。

中津の小神学校(1930年)

「祝いのために飾った小さな聖堂で、数少ない信者のために三日間の説教と荘厳な儀式を実施しました。それには多くの一般市民も参加し、関心をもってカトリックの儀式に見入っていました。……

私たちの一番大きな慰めは、イエス様の周りに集まり、神様やマリア様の賛美を歌ったり、祈ったりした、信者でない多くの子どもたちを見ることでした……」(リナルディ神父へ　ボレッティーノ・サレジアーノ誌一九二八年三月号掲載　チマッティの手紙2より)

書くことが好きだったチマッティ神父は、来日前も多くの書物を著していましたが、宮崎に来てすぐに活字による宣教を始めました。ドン・ボスコが修道会名を「サレジオ会」と名付けたほど尊敬した聖フランシスコ・サレジオが、宗教改革の真只中、なんとか人々を正しい方向へ導くためにとチラシを配って歩いたように、チマッティ神父もチラシを作って家庭や学校に配りました。その内容は現代でも通じるような興味深い内容です。たとえば「宗教はなぜ必要か?――今、宗教が最も肝要であり、大切である理由。またカトリックに対する様々な異説についての簡単な問答」「生命は何の役に立つや　――悲しむべき新聞の記事」「人生の本質　――霊魂の特異性・自由は危険なものであると同時に優れたるもの」「信心は優れたものである　――信心はすべての境遇並びに職業に適している」「自殺について　――自殺の歴史的過程、自殺の原因」などです。

印刷物のことを「善や悪をするために世に存する驚くべき武器」と呼んでいたほど出版の力の大きさを信じていたチマッティ神父は、昭和五年、大分に「ドン・ボスコ印刷学校」を創設し、以後すべての出版物はここで印刷されるようになりました。

シスターも来てください!

子どもたちを集めて勉強したり、音楽をしたり、スポーツをしたり……まだまだやるべきことはたくさんありました。小さな子どもや女子のために、シスターの存在の必要性も感じていました。そのため何度も、サレジアン・シスターズの本部あてに来日を促す手紙を書いています。

「…(途中略)　私は準管区長としてではなく、宮崎の独立宣教区の教区長として、サレジアン・シスターズのシスター方がこの宣教地に早く働きに来られるよう、正式にお願いいたします。来て下されば すぐに、幼稚園や教会学校で働くことができます。少女たちは場所が足りないほど沢山います。……」(サレジアン・シスターズ総長へ　宮崎一九二八年十月二九日　チマッティの手紙2より)

「総長様がお選びになる方々は、言葉を学んだ後、家事、裁縫、刺繍等、また幼稚園や福祉事業、教会学校で活動ができる方であるようお願いいたします。音楽のできる方も必要です。才能があればあるほどよいのです。」(サレジアン・シスターズ総長

来日した6人のFMAシスターたち(1929年)

カリタス修道女会の最初のシスター誕生(1939年)

へ　宮崎一九二九年一月　同）

とうとう希望が叶い、一九二九年、サレジアン・シスターズ六人が来日します。同じ頃、福者[※1]ドン・ボスコのお祝いのためイタリアに一時帰国していたチマッティ神父は、日本の現状を説明し寄付を募る毎日でしたが、思うように集まりませんでした。その代わりに、サレジオ会の若い神学生九人を連れて日本に戻りました。働き手が増え、幼稚園や教会学校に着手しましたが、一九二九年の世界大恐慌は日本にも影響を及ぼし、「パンがない」とイタリア本部に電報を打ったこともあるほど苦しい生活が続きました。神様の助けだけが頼りでした。

「主よ、あなたは私たちの状態をよくご存じです。お任せいたします。み心のままに！　私たちが正しく生きていれば、あなたは必ず助けてくださいます」（日誌より）

チマッティ神父は、来日した当初から、宣教のためには日本人の神父が必要だと考え、その実現のため神学校の建設に尽力しました。この間、慣れない環境と貧しい食事のため、病気になる会員が続出して、事業は遅々として進まないこともありました。

その後、東京に進出することになり、三河島教会を引き受けた後、練馬と杉並にまたがる広大な土地を借金で購入して「育英工芸学校」（後の育英工業高等専門学校、現在のサレジオ工業高等専門学校）を開校し、さらに後にドン・ボスコ社となる出版事業本部も移し、ここから「ドン・ボスコ伝」「ドン・ボスコの予防教育法」「カトリック講話集」などを次々に出版しました。同じ場所には更に、修練院や修学院を設立しました。

別府では、既にサレジアン・シスターズが乳児院を始めていましたが、チマッティ神父は宮崎でも、見放されたお年寄りや孤児たちに心を痛め、施設を開始すべきだと考えていました。幸いなことに、宮崎市と県当局が福祉事業に援助金を支給するとの話があり、昭和七年十二月、落成にこぎつけました。

チマッティ神父はまた、貧しい人たちへの家庭訪問がきっかけとなって生まれた「救護院」でお世話を続けていた女性たちによる、宮崎カリタス修道女会[※2]の創立を、苦楽を共にして来たカヴォリ神父に助言しました。

こうして、来日してから十一年の間に、サレジオ会の事業拡大、サレジアン・シスターズの来日、イエスのカリタス修道女会の設立と、現在のサレジオ家族の基礎が出来上がったのです。（G・S）

金子賢之介神父が語る、チマッティ神父の想い出

私が宮崎の小神学校（司祭志願者のための初期の学校）にいた時のことです。中学二年くらいだったですかな？　チマッティ神父はドン・ボスコがそうしていたように、私たちを度々遠足に連れ出してくれました。神父自身が科学者の目をもっていましたから一緒に遊びながら石を拾ったり植物採集をしたものです。私も神父に倣って手当たり次第、草や花を集めて持って帰ったんですが、そのまま忘れて放っていましたね。

数日後「金子君、ちょっと来なさい」と呼ばれて神父の部屋へ入って驚きました。私が採ってきたいくつもの草花がそれはきれいにきちんと標本になっているんです。きっと私だけの標本ではなく、他の生徒の分もそうしてあったと思います。

真の教師の姿を見た思いがして、この時の喜びと驚きは今でも忘れることができませんね。

※1　1929年6月2日　ローマにてドン・ボスコ列福される。列聖されるのは1934年4月1日。
※2　宮崎カリタス修道女会は、2009年名称をイエスのカリタス修道女会に改称。

サレジオ家族訪問

創立七十五周年を迎えたサレジオ工業高等専門学校（東京・町田）

サレジオ高専の教育目標

校長 Fr.小島知博

今年で創立七十五周年を迎える私たちの学校をあらためて紹介します。日本には工業高等専門学校（高専）が現在六〇校あります。そのうち私立高専は三校で、ミッションスクールは本校だけです。サレジオ高専の日本社会に対する使命と責任は「技術者」を育てることです。私たちは明確に「身につけた技術を人のために役立てることのできる技術者」を育てるという教育目標を掲げています。「人のために役立つこと」をはっきりと謳うことが本校の特徴であり、この精神を教育に反映させる土台となるのがキリスト教の教えです。キリスト教の精神を伝えるために、倫理や宗教学の授業で聖書の内容を扱っています。

もう一つの特徴はドン・ボスコの学校という点です。それはドン・ボスコ教育の原点である「アシステンツァ」を教職員が実践していることです。私たちはアシステンツァを「寄り添う教育」と捉えています。教員は学生たちのそばにいて技術指導では安全面も含めて教育しています。同時に生活面での指導も重要です。特に成長著しい時期ですので、やんちゃな学生もいればおとなしくて目立たない学生もいます。いろいろなタイプの学生たちとしっかりと関わるためにもアシステンツァは必要です。職員室や研究室に学生たちの姿があって笑顔が絶えないというのがドン・ボスコの学校の特徴ですし、他の高専にない私たちが誇りとしたい伝統です。

本校の歴史をひも解くと、戦争のための危機をはじめ、大きな火災など幾多の困難を切り抜けて今に至っています。本校は神から祝福されているのです。慢心することなく人事を尽くすことに専念し続けることが大切です。

これからも歴代の卒業生たちに続くように、日本社会に貢献できる多くの若者たちを育成して行きます。そのためにも多くの方に期待され、大切にされ、サポートされる学校でありたいと願い、努力いたしますので、ご理解とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

サレジオ高専誕生時のチマッティ神父の喜び

来日後十年を経過したチマッティ神父は、都会の特色を生かした独自の事業によってサレジオ会を紹介すべき時が来たと考えた。この新しい計画の実現のために、当時大分の印刷学校の責任者だったマルジャリア師を起用し、一九三六年（昭和十一年）一月三十一日、現在の東京育英高等専門学校が工業学校として落成したのである。チマッティ神父はこの新しい学校を「私たちにとっての聖年の初穂」と呼び、つぎのように記した。「昨日、待ちに待った落成式が行われ、心は喜びに満ちている。ドン・ボスコが天に凱旋した記念日にこの学校を聖人に捧げた。」そして恩人たちにこう言う。「ご覧ください、私たちの学校を！　これは私たちの心からほとばしる喜びと皆様の寛大さに対する感謝の叫び、さらに、まさにこれから手をつけようとしている幾多の善への希望の讃歌であります。」

（「チマッティ神父の生涯：クレバコーレ著」より）

七十五年の歩みの中で

サレジオ高専・事務長 木戸能史

一九三四年の創立時になぜ「育英」という校名が付いたのかは、誰も知らない。戦前の時代に「帝の都に英才を育てる」ということであったのかもしれない。この町田に移転するに際して「育英」という名称が多くの野球強豪私立高校で使われていること、神奈川に近い町田市ではサレジオ学院（横浜）の知名度が高いこともあって英語名にあわせて「サレジオ」に本家帰りした。しかし学校法人名と同窓会、学園祭に育英の名前をとどめている。

筆者が帝都育英学院中学校に入学したのは一九五九年（昭和三十四年）、翌年に二十五周年を迎えている。その後五〇年間の歩みは私自身の現在に至る歩みである。

杉並時代の育英高専を語るには一九七五年（昭和五十年）に就任、以降二〇〇二年（平成十四年）まで二十六年の長きにわたって校長の職にあったヘンドリックス師をおいて他に語れない。師の育英高専に対する思いの深さと人柄の優しさに魅かれ、現在も毎年、ヘンドリックス師が住まわれる杉並のSITECがある地（元・育英高専校所在地）で同窓会顧問の但馬剛氏を中心に「育英ファミリーの会」が開催され、この二〇一〇年三月の四回目の会でも予想を超える二〇〇人超の卒業生、その父母、OB、現職の教職員多数が集まった。これも育英を象徴するイベントの一つである。

さて新キャンパスは移転開校して五年を経て、この地で入学し卒業する最初の第四十三期生を送り出したばかりである。新しい土地に定着し根付くことは大変なことであり、今年も学生募集は日本社会の大変動の中で、若者の工学離れ、経済不況、高専の質保証という三重苦の中で決して安泰ではない。

そもそも、サレジオ高専の教育には古くからサレジオ会司祭と修道士（サレジオ会員）のカリスマによるところが大であった。それは今も本質的に変わらないものであるが、しかし現在のように学校の中にわずかな司祭と少数の信者教職員しかいない時代に、対応する方法として、サレジオ会員と共に協働者である教職員がチームを組んで夫々の特性を生かし、全体としてドン・ボスコの精神を継承することなのではないだろうか。

1941年(昭和16年) に育英工芸学校を卒業され、84歳現役でご活躍の川本舜正氏より提供されたもので、チマッティ師や当時の生徒たちが写っている貴重な写真である。また杉並時代にマジェロ修道士が来校された折、戦前の工芸学校には洋裁科があったという当時を懐かしむお話を伺った。

1959年、筆者が帝都育英学院中学校に入学した当時の中学校舎である。旧軍の兵舎を移築したものと聞いている。すでに相当の年数を経ており、ペトラッコ神父の英語の授業中、師が床の板を踏み抜いて下階の天井を突き破ったのを目撃している。

サレジオ工業高等専門学校

〒194-0215 東京都町田市小山ヶ丘 4-6-8
学　科：　デザイン学科、電気工学科、
　　機械電子工学科、
　　情報工学科及び専攻科
学生数：　4学科+専攻科 計756名（2010 年度）
教職員数：137名（非常勤を含む）

GOOD NEWS

ちょっといい話

地球環境を守る私たちの一歩

イエスのカリタス修道女会
修練院

地球の温暖化は、世界の大きな関心事であり、懸念されている問題です。このために、イエスのカリタス修道女会日本管区でもさまざまな対策がとられています。修道女を目指す修練者たちが生活している修練院（東京都杉並区）において、試行錯誤の結果、生活の一部となっている環境保全のための取り組みをご紹介しましょう。

水に関して

・水の使用量は水圧によっても変わる。水は細く出す。特に必要でなければ流し水にせず、溜めて使用する。

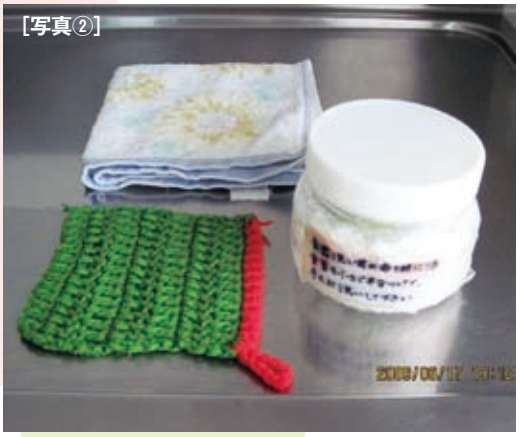
・洗剤の混入されていない水や野菜のゆで汁などは捨てず、花や野菜の潅水に使用する。

・トイレで使用する水の量を減らすため、タンクの中に二・五リットルのペットボトルを入れておく。

食器洗いに関して

食事が済むと、食卓に備えてある古布で皿を拭いてきれいにする。きれいに拭いた皿、その他の食器を専用の布で水洗いする（一番洗い）。［写真①］この

［写真①］


［写真②］

とき、食器洗いの洗剤は不要。次にアクリル毛糸で編んだたわしを使ってすすぐ。最後に、一番洗いで使用した布を重曹で洗濯する。古布・アクリルたわし・重曹が、食器洗いの三種の神器。［写真②］おかげで修練院の水道管は油が付着しておらず、においもしない。

残飯の処理に関して

基本的に、残飯は汁類も含めてすべて、事前に掘った畑の穴に埋める。［写真③］埋める際、腐敗を促進する馬糞と石灰を共に投入する。［写真④］そして次回のためにまた新しい穴を掘って終了。

招待客がいても

食事の席にお客様がいらしても、私たちのこのスタイルは変わりませんので、おしぼりやティッシュを差し上げることはありません。食卓には小さく切られた布があるだけです。その結果、「これはいい考えだ」と賛同してくださる方々がほとんどです。

このような手順を踏むことは、何かと面倒なのは確かですが、習慣になってしまえばしめたもの。ここの修練院にはフィリピン、ベトナム人の修練者もいて、水の大切さを身にしみて分かっている彼女たちのよい習慣もあり、水を大切にして、自然のものは自然に帰すという意識が高いということも言えるようです。

［写真③］

［写真④］

イエスのカリタス修道女会

社会福祉法人カリタスの園 つぼみの寮 表彰

今年2月2日(火)、社会福祉法人つぼみの寮(東京都杉並区)が、補導受託者としての多年にわたる業績により、東京高等裁判所長より表彰されました。

施設長のシスター長崎は、「つぼみの寮にいる乳幼児の多くは、いろいろな事情によって親から離れて生活しなければならない境遇にあります。更生のためにボランティアとしてここに送られてくる少女たちが、つぼみの寮で精一杯生きている赤ちゃんたちを抱いたりミルクを飲ませたりすることで、再出発への勇気と力を得てくれることを願いながら、受け入れを続けています。」と話してくれました。

つぼみの寮のシスターと職員たち

DBVG

今年もソロモン諸島へ出発

DBVG(ドン・ボスコ海外青年ボランティア・グループ)の夏の活動派遣先がソロモン諸島に決定し、2010年8月14日の夜、サレジオ会Fr.村松と岡本神学生をリーダーに、総勢20名の青年たちが成田空港より出発する予定です。

今年はテテレ地区の村にて、ソロモン在住のFr.ラップの指導の下、現地の青年たちと共に井戸堀りに挑戦します。

ドン・ボスコの聖遺物が日本へ!

本誌No.3に紹介した聖遺物の巡礼が、来年2月に日本に上陸することが決まりました。これは2015年のドン・ボスコの生誕200周年を迎えるための準備の一環として行われているイベントです。

日本各地のサレジオ家族の拠点を巡る細かい日程の検討が始まっています。皆さんの地に入る日を楽しみにお待ちください。

イエスのカリタス修道女会

訃報

天国での永遠の安らぎをお祈りいたします。

4月20日 Sr.マルチャ鳥巣ハルエ
享年82歳

乳児院、児童養護施設、養護老人ホームでの使徒職に従事。愛をもって入所者に寄り添い、生涯、温和、謙遜な姿勢でカリタスを生きたシスターでした。

5月10日 Sr.ロレンザ水口八重子
享年72歳

主に保育園、児童養護施設での使徒職に従事。リュウマチの痛みとともに歩んだシスターの奉献生活は、主の十字架の犠牲を思い起こさせるものでした。

ドン・ボスコの風 No.5
BOLLETTINO SALESIANO
2010年7月26日発行

編集人　関谷 義樹
発行人　アルド・チプリアニ
発行所　サレジオ会「ドン・ボスコの風」編集事務局
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12 サレジオ会管区長館
電話：03-3353-8355　Fax：03-3353-7190
Eメール：DB-no-kaze@donboscojp.org
郵便振替　00100-7-412947「ドン・ボスコの風」編集事務局
アートディレクター　後藤 宏幸
印刷所　三英グラフィック・アーツ(株)

ドン・ボスコが1877年に創刊した"Bollettino Salesiano"の日本版「ドン・ボスコの風」は、創刊者の方針により出来るだけ多くの方々に無料でお届けすることになっております。そのために様々な努力を払っていますが、この雑誌の主旨にご賛同くださる方には是非ご援助いただきたく、挟み込みの払込取扱票にてご寄付を募ります。よろしくお願い申し上げます。

from the Editor　編集後記

創刊以来本誌の編集を担当したスタッフが交代します。次号からは更に新鮮な誌面となることと思いますので、引き続きご愛読くださいますようお願い致します。

(後藤宏幸・後藤さゆり・丸山和美・梅村護・梅村百合子・山田博子　以上ABC順)

ドン・ボスコの風 5 2010年7月
BOLLETTINO SALESIANO LUGLIO 2010

「わたしたちは、イエスに会いたいのです。」

ストレンナ2010

若者に福音を伝えよう。ドン・ルアにならい、本物の弟子、情熱あふれる使徒となって。

ストレンナ：イタリア語で「贈りもの」。ドン・ボスコの時代からの習慣で、新年にサレジオ会総長が「今年の目標」として発表しています。

サレジオ会主催　野尻湖少年聖書学校

イエスのカリタス修道女会主催　カリタスサマースクール

サレジアン・シスターズ主催　ff（フォルテッシモ）in 野尻湖

ある日ギリシャからやってきた人々が「イエスにお目にかかりたい。」と弟子に言いました。それを聞いたイエスは、遠くにいる人々が自分に会うことを望んでいることを知り、今こそ全世界の人々の救いのため、自分が死に渡された後、復活の栄光を表すという決定的な出来事を起こす時がやってきたことを悟ったのです。

この弟子がいたからギリシャ人たちはイエスに会いたいという望みを表すことが出来たのです。この弟子がいたからイエスご自身が生涯の重大な時がやってきたことに気づいたのです。

今日もまた心のうちに、喜びばかりでなく不安を抱えながらもイエスに近づき、イエスに会いたいという望みをもっている人々を導いてくる弟子を、イエスは必要とされています。サレジオ家族のメンバーは、この弟子になるよう招かれているのです。

（チャーベス総長による2010ストレンナ解説より）

この夏も野尻湖という大自然の中で行われるサレジオ家族各修道会主催の青少年キャンプで、多くの若者たちが指導者に導かれてイエスと出会うことでしょう。

発行：サレジオ会「ドン・ボスコの風」編集事務局　〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12 サレジオ管区長館
TEL: 03-3353-8355 FAX: 03-3353-7190 Eメール：DB-no-kaze@donboscojp.org